

2007年 6月 16日(土) — 第2回 —

やよいフィールドスタッフ 田んぼの生きもの調査

石橋新田の田んぼには野鳥がたくさん飛来する



調査日時：2007年6月16日

参加人数：25名

参加団体：上越市、上越普及指導センター、J A 、
「ちゃぐりん道場」小学生9名、やよいF S

調査地点：上越市矢住・平野育男さんの秋代・ふやみ
ずたんぼ(無・無栽培) 上越市石橋新田・西條裕之さ
んの秋代・ふゆみずたんぼ(無・無栽培)

調査項目：基礎調査、生息環境調査、イトミミズ・ユ
スリカ調査、コドラート調査

雑草が少なく「慣行栽培より稲姿もよく茎も太い」

調査3年目にして初めて田植え前に除草せずにすんだ「やよいフィールドスタッフ」の田んぼ。田植えの後も雑草は「チラホラ出ている程度で、見回って少々抜くだけ」(メンバーで事務局担当の松永淳哉さん)でした。

稲の成育も順調で、「去年は草に負けて分けつしない株もあったが、今年は慣行栽培より稲姿がいいし、株も太いし、ピッキリ」「米ぬかしかやってないのに驚いた」「土の表面がトロトロしている。山間なので平間の石橋新田のように暗渠をはっていないが、機械を入れても深く沈むこともない」と矢住の田主で

るメンバーの平野育男さんは「不思議」を連発。

気になるのは生きもの数が少ないこととイネミズゾウムシの被害が大きいこと。生きもの数が少ないのは「秋代かきを行ったため、というよりは今シーズン2月から雪が降らなかった影響では。見つかる生きものの種類は多い」と松永さん。西條裕之さんは「田んぼの周りにサギやカモ、ツバメが集まってくるので、かなり食べられているのかもしれない」と話します。実際に他の生きものの餌となるイトミミズは10アールあたり一千万匹を超え、十分に増えていることがわかりました。

もあ やよいフィールドスタッフ

産地紹介：無農薬有機栽培や減・減栽培に取り組もうと、日本の稲作の開始期「弥生時代」を冠に、00年に結成された若手生産者のグループ。上越市頸城区(旧・頸城村)を中心に頸北地方の17名が参加。「田んぼの生きもの調査」は3年目(昨年まで「くびきECO研究会」名で参加)。

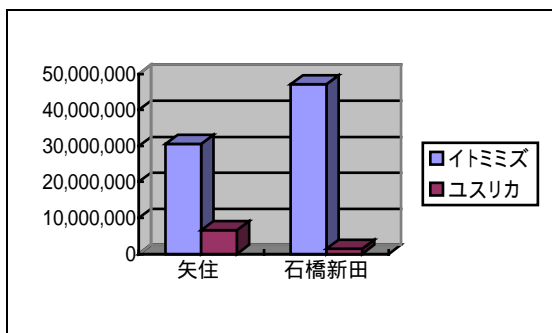
主な出荷銘柄：コシヒカリ



調査地：上越市頸城区矢住地区、石橋新田地区

結果発表！

やよいフィールドスタッフ 第2回調査 2007年6月16日			
水田名		矢住	石橋新田
	水管理	秋代・ふゆみ	秋代・ふゆみず
農法	耕し方	耕起	耕起
	農薬・化学肥料	無・無栽培	無・無栽培
土のなかの生きもの調査 (10aあたり匹)	イトミミズ	30,575,000	47,100,000
	ユスリカ(幼虫)	6,575,000	1,350,000
生息環境調査	天気	晴れ	晴れ
	気温()	23.0	22.1
	水温()	26.9	26.6
	水深(cm)	3.0	5.6
	pH(酸度、地表面)	6.82	7.22
	EC(電気伝導度、mS)	0.106	0.146
	DO(溶存酸素量、mg/l)	0.467	0.320



生息環境調査の機器操作も手馴れたメンバー



見つかった生きものたち

- ・ 矢住・コドラート調査(10aあたり) = シジミ 46万3000、ミジンコ3万、ヨコエビ2万3000、ゴマフガムシ(幼虫)1万3000、ヒル7000
- ・ 石橋新田・コドラート調査(10aあたり) = ミジンコ184万3000、ゴマフガムシ(幼虫)1万2000、シジミ1万、ゴマフガムシ(成虫)6000、ドジョウ2000、コムズムシ2000

「ちゃぐりん道場」の子どもたちも参加



データを読む！ 岩淵 成紀氏(NPO法人・田んぼ 理事長)

石橋新田 = 4枚の田んぼを1枚にしたため田んぼ内に高低差があり、東側が田植え後、深水になりすぎて3日後くらいに苗自体が何かに覆われ、1週間とどけたため補植したというが、苗を3葉から4~5葉にすればいいのではないかと。いずれにしても反省点を補うに十分な数のイトミミズがいる。昨年の収穫後、10月25日に田起しし、翌日に代かきした後、水を入れ、後は何も入れていないというのに驚きだ。

暖冬だったのでヒエもコナギも発芽するはずだが、土が還元状態になっているので、ヒエの種が炭化して発芽できないのだろう。

5月16日に田植えと同時に米ぬかペレットを入れているが、そのためか電気伝導度が高い。有機栽培というより化学肥料栽培の値に近く、有機物が多すぎる。もう追肥の必要はあるまい。